

# ラルテー語の人称標示

大塚 行誠

キーワード： インド ミゾラム チン語支 ミゾ語 ティディム・チン語

## 要旨

ラルテー語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のチン語支に属する。本論文では、インド共和国ミゾラム州アイゾール市ボンコーン地区で行った言語調査の結果を基に、周辺言語のミゾ語およびティディム・チン語と対照しながら、ラルテー語の人称標示を見ていく。

## 1. ラルテー語の概要

ラルテー語 (Ralte, ISO 639-3: ral) は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派チン語支の北部チン語群に属する。ラルテー語の母語話者は 2007 年の時点で 900 人程度おり、話者コミュニティはインド共和国ミゾラム (Mizoram) 州のアイゾール (Aizawl) 周辺をはじめ、インド北東部の各地に点在する (西田 1989; Lewis eds. 2016)。この地域における主な共通語はミゾ語であり、ラルテー語話者の大半がミゾ語とラルテー語のバイリンガルである。

本論文で研究の対象とする言語は、インド共和国ミゾラム州アイゾール市のボンコーン (Bawngkawn) 地区におけるラルテー語である。インフォーマントはラルラムザウヴァ・ラルテー (Lalramzauva Ralte) 氏 (男性, 1946 年 7 月生) で、ミゾ語とラルテー語の両方を流暢に話すことができる。筆者は 2016 年の 3 月 17 日から 3 月 22 日にかけて、Chhangte (1986) と Chhangte (1993) に記載のあるミゾ語の例文をもとに、ラルテー語の文を聞き取る調査を行った<sup>1</sup>。

## 2. ラルテー語の音韻

音節構造は (C1) (V1) V2 (V3) (C2) /T と表す事ができる。括弧内の要素は任意のものである。C1 は頭子音, V1, V2 および V3 は母音, C2 は末子音, そして /T は音節全体にかぶさる声調を示す。子音には頭子音 /p, p<sup>h</sup>, b, m, f, v, t, t<sup>h</sup>, d, t [t], t<sup>h</sup> [t<sup>h</sup>], n, l, r, s, z, ɛ, c [tɛ], c<sup>h</sup> [tɛ<sup>h</sup>], j [dʒ], k, k<sup>h</sup>, g, ŋ, ʔ, h/ と末子音 /p, m, t, n, l, l', r, r', k, ŋ, ʔ/ があり、母音には短母音の /i, e [ɛ], a, o [ɔ], u/ と長母音の /i:, e: [ɛ:], a:, o: [ɔ:], u:/ がある。音節中の V1 または V3 に現れる母音は /i/ [i] と /u/ [u] のどちらかであり、C1 V1 V2 V3 C2 /T の全てが現れる音節も存在する。

声調素には上昇調 / ˆ / [H], 中平調 / ˘ / [L], 下降調 / ˑ / [V] の 3 種類があると考えられる。声門音 /ʔ, l', r'/ で終わる音節および短母音の後に閉鎖音の末子音が来る音節は原則として低いピッチ / ˘ / [L] で発音するが、中平調の音節の後に続く場合は高いピッチ / ˑ / [V] になる。

<sup>1</sup> 本研究は JSPS 科研費 (26770136) の助成を受けたものである。

### 3. 周辺言語における人称標示

本論文では周辺言語との対照的な観点から考察を進める為、先ずティディム・チン語（北部チン語群）とミゾ語（中部チン語群）における人称標示の概要について簡潔に述べておく。

#### 3.1 ティディム・チン語

Henderson (1965: 108-111) と大塚 (2013) の記述を基に、ティディム・チン語の人称代名詞と人称助詞を示す。人称代名詞は自立語である。人称助詞には前置型と後置型があり、後置型はもっぱら述部動詞の後に置いて主語の人称を示す。一方、前置型の人称助詞は名詞句の前に置くと所有者の人称を示し、述部動詞の前に置くと主語の人称を示す（例 (1) 参照）。

表 1 ティディム・チン語の人称代名詞

	SG			PL		
	ABS	ERG	GEN	ABS	ERG	GEN
1	<i>kěi</i>	<i>kén</i>	<i>kêi</i>	<i>kôu</i>		
1 (INC)				<i>ěi</i>	<i>ên</i>	<i>êi</i>
2	<i>nǎŋ</i>	<i>nâŋ</i>		<i>nôu</i>		
3	<i>ámàʔ</i>	<i>ámân</i>	<i>ámā</i>	<i>ámâ:u</i>		<i>ámā:u</i>

表 2 ティディム・チン語の人称助詞

	前置型	後置型（代表的なもの）			
		REAL		IRR	
		SG	PL	SG	PL
1	<i>kà= / kǎ= / ká=</i>	<i>=iŋ</i>	<i>=úŋ</i>	<i>=níŋ</i>	<i>=nú:ŋ</i>
1 (EXC)	<i>i= / ī= / í=</i>		<i>=háŋ</i>		<i>=ní:</i>
2	<i>nà= / nǎ= / ná=</i>	<i>=tèʔ</i>	<i>=ùʔtèʔ</i>	<i>=nítèʔ</i>	<i>=nú:tèʔ</i>
3	<i>à= / ā= / á=</i>	<i>=ø</i>	<i>=ùʔ</i>	<i>=īntéʔ</i>	<i>=ūntéʔ</i>

一人称複数包括形を除き、前置型の人称助詞を用いて複数を示す場合、助詞 *=ùʔ* を用いる。

- (1) a. *à= nē: =ùʔ*  
       3= eat<sup>1</sup> =PL  
       「彼らは食べました。」
- b. *á= lá:ibǔ: =ùʔ*  
       3= 本 =PL  
       「彼らの本」

談話参加者（話し手または聞き手）のいる位置への移動は、動詞に方向接辞 *ǒŋ- / hǒŋ-* を付けて表す（例 (2) 参照）。この *ǒŋ- / hǒŋ-* は人称標示にも関与している。二項述語または三項述語の節で被動者や受領者、被使役者が談話参加者である場合、すなわち、一人称または二人称の目的語を伴う節では、動詞の前に必ず方向接辞 *ǒŋ- / hǒŋ-* を付ける（例 (3), (4) 参照）。

- (2) *ámàʔ ǒŋ- pāi*  
 3SG DIR- go<sup>1</sup>  
 「彼は（私の所に）来ました。／彼は（あなたの所に）行きました。」

- (3) *ámân nǎŋ ǒŋ- ěn*  
 3SG.ERG 2SG DIR- look<sup>1</sup>  
 「彼はあなたを見ました。」

- (4) *ámá:u kôu jāpā:n pā:u ǒŋ- hìʔ*  
 3PL 1PLEXC Japan language DIR- teach<sup>1</sup>  
 「彼らは私たちに日本語を教えました。」

### 3.2 ミゾ語

Chhangte (1993: 65-66, 89-92) の記述を基に、ミゾ語における人称代名詞（表 3 参照）と人称助詞を示す。人称代名詞は自立語である。人称助詞は名詞句の前に置いて所有者の人称を示したり、述部動詞の前に置いて主語の人称を示したりする（表 4 参照）。更に、述部動詞の前または後に置いて目的語の人称を示すタイプの人称助詞もある（表 5 参照）。

表 3 ミゾ語の人称代名詞

	SG	PL
1	<i>kěi</i>	<i>kèiní</i>
2	<i>nǎŋ</i>	<i>nàŋní</i>
3	<i>ání</i>	<i>ànní</i>

表 4 ミゾ語の人称助詞（主語／所有者）

	SG	PL
1	<i>kà= / ká=</i>	<i>kǎn=</i>
2	<i>ì= / í=</i>	<i>ĩn=</i>
3	<i>à= / á=</i>	<i>ǎn=</i>

表 5 ミゾ語の人称助詞 (目的語)

1.OBJ	<i>mì= / mìn=</i>
2.OBJ	<i>=cé</i>

#### 4. ラルテー語の人称代名詞と人称助詞

##### 4.1 人称代名詞

人称代名詞は自立語であり、単数形と複数形がある (表 6 参照)。更に、一人称複数形の人称代名詞には、包括形 (聞き手を含む形式) と除外形 (聞き手を含まない形式) の区別がある。表 3 に示したように、ミゾ語には一人称複数形の人称代名詞に包括形と除外形の区別が無く、一貫して *kèimí* (1PL) という人称代名詞を用いる (Chhangte 1986: 84)。一方、ティディム・チン語は、表 1 に示したように、一人称複数形の人称代名詞に包括形 *ēi* (1PL.INC) と叙外形 *kōu* (1PL.EXC) という区別がある点でラルテー語と似ている (Henderson 1965: 148, 151)。

表 6 ラルテー語の人称代名詞

	SG	PL
1	<i>kēi</i>	<i>kēimú?</i>
1 (INC)		<i>ēi</i>
2	<i>nāŋ</i>	<i>nāŋmú?</i>
3	<i>āmá?</i>	<i>āmú?</i>

##### 4.2 人称助詞

###### 4.2.1 主語または所有者の人称を示すもの

人称助詞を述部動詞の前に置くと主語の人称を、名詞句の前に置くと所有者の人称を示す。

表 7 ラルテー語の人称助詞 (主語/所有者)

1	<i>kā=</i>
1 (INC)	<i>ī=</i>
2	<i>nā=</i>
3	<i>ā=</i>

自動詞の前に人称助詞を置いた場合の例を以下の (5) と (6) に示す。主語が複数である場合には複数を示す助詞 *=ù?* を述部動詞の後に置く (例 (6) 参照)。ミゾ語には単数形の人称助詞と複数形の人称助詞がそれぞれある一方、ラルテー語とティディム・チン語では、主語が複数である事を示す場合には複数を示す助詞 *=ù?* を述部動詞の後に置く。

ティディム・チン語では一人称複数包括形の人称助詞を用いる場合、複数を示す助詞 *=ù?* を

述部動詞の後に置かないが、ラルテー語では一人称複数包括形の人称助詞  $\bar{i}$  (=1PL.INC) を用いた場合でも複数を示す助詞  $=\acute{u}?$  を置かなければならない (例 (7) 参照)。

- (5)  $k\bar{e}i$   $k\bar{a}=$   $k\acute{e}l$   $=\bar{i}\eta$   
 1SG 1= go<sup>l</sup> =IRR  
 「私は行きます。」

- (6)  $\bar{i}n$   $s\acute{u}\eta$   $=\acute{a}?$   $k\bar{a}=$   $\acute{o}m$   $=\acute{u}?$   
 house inside =LOC 1= exist<sup>l</sup> =PL  
 「私たちは家の中にいます。」

- (7)  $k^h\acute{o}i$   $=\acute{a}?$   $=h\acute{a}:$   $\bar{i}=$   $c\bar{a}:k$   $=d\acute{o}:n$   $=\acute{u}?$   
 where =LOC =DET 1PL.INC= eat<sup>II</sup> =FUT<sup>II</sup> =PL  
 「私たちはどこで食べましょうか?」

複数を示す助詞  $=\acute{u}?$  は、その直前に  $u$  という母音 (例 (8) 参照) または  $u?$  という音形 (例 (9) 参照) が来ると  $=v\acute{u}?$  という異形態で現れる。

- (8)  $k\bar{a}=$   $k^h\acute{u}\eta$   $=t\acute{o}?$   $=\acute{o}u$   $=v\acute{u}?$   
 1= sit<sup>l</sup> =PERF =NEG =PL  
 「私たちはもう座りません。」

- (9)  $\bar{a}=$   $\bar{u}$   $n\acute{o}u?n\acute{o}u?$   $=v\acute{u}?$   
 3= say<sup>l</sup> ADV =PL  
 「彼らは皆言いました。」

真偽疑問文では文末に  $=\acute{a}:i$  という助詞 (例 (10) 参照) を置くが、主語が複数の場合には複数を示す助詞  $=\acute{u}?$  と  $=\acute{a}:i$  との融合形と考えられる形態素  $=u\acute{a}i$  が用いられる (例 (11) 参照)。すなわち、複数を示す助詞  $=\acute{u}?$  は形態と音韻の面で影響を受けやすい。

- (10)  $n\bar{a}=$   $d\bar{a}m$   $=\acute{a}:i$   
 2= fine<sup>l</sup> =Q  
 「あなたは元気ですか?」

- (11) *nā= hōŋ- kēl =dō:n =uāi*  
 2= DIR- go<sup>1</sup> =FUT<sup>1</sup> =PL.Q  
 「あなたたちはこちらに来るのですか？」

名詞句の前に人称助詞を置くと、所有者の人称を示す (例 (12) 参照)。所有者が複数である場合、人称助詞のほかにも、複数を示す助詞 *=ú?* を名詞句の後に置く (例 (13) 参照)。

- (12) *kā= īn*  
 1= house  
 「私の家」

- (13) *kā= ūi =ú?*  
 1= dog =PL  
 「私たちの犬」

#### 4.2.2 目的語の人称を示すもの

表 7 に挙げたものとは別に、目的語の人称を示す単複同形の助詞もある (表 8 参照)。

表 8 人称助詞 (目的語)

1.OBJ	<i>ǎ:i=</i>
2.OBJ	<i>=ci?</i>

以下の例 (14) と例 (15) に示したように、被動者や受領者等が話し手である場合、一人称目的語を示す人称助詞 *ǎ:i=* を述部動詞の前に置く。

- (14) *lāl =īn ǎ:i= tēi*  
 chief =ERG 1.OBJ= scold<sup>1</sup>  
 「主人は私を叱りました。」

- (15) *kā= nū: =lé? kā= pā: =īn ǎ:i= vuā =ú?*  
 1= mother =and 1= father =ERG 1.OBJ= beat<sup>1</sup> =PL  
 「私の母と私の父は私を打ちました。」

二人称主語を示す人称助詞 *nā=* (2=) と *ǎ:i=* (1.OBJ=) との融合形 *nǎ:i=* (2>1.OBJ=) もよく使われる。三人称主語を示す人称助詞 *ā=* と *ǎ:i=* との融合形は無い (例 (14), (16) 参照)。

- (16) *ná:i= pē =īŋ =ǎ:i*  
 2>1.OBJ= give<sup>I</sup> =IRR =Q  
 「あなたは私にくれるんですか？」

被動者や受領者が聞き手である場合には、二人称目的語を示す人称助詞 *=ci?* を述部動詞の後に置く (例 (17)-(19) 参照)。

- (17) *kā= nū: =īn ā= sām =ci?*  
 1= mother =ERG 3= call<sup>I</sup> =2.OBJ  
 「私の母はあなたを呼んでいます。」

- (18) *kā= nēi =ci?*  
 1= marry<sup>I</sup> =2.OBJ  
 「私はあなたと結婚しました。」

- (19) *á:k =īn ā= cū: =ú? =ci?*  
 hen =ERG 3= peck<sup>I</sup> =PL =2.OBJ  
 「(何羽かの) 鶏があなたをつつきました。」

ティディム・チン語には目的語の人称を示す人称助詞が無いが、ミゾ語には目的語の人称を示す人称助詞がある。この点では、ラルテー語はミゾ語と似ていると言える。

### 4.3 方向接辞と再帰接辞

#### 4.3.1 方向接辞 *hōŋ-*

ラルテー語には *hōŋ-* という、ティディム・チン語の方向接辞 *ōŋ-* / *hōŋ-* と似た接頭辞がある。ラルテー語の *hōŋ-* は、ティディム・チン語の *ōŋ-* / *hōŋ-* と同様、談話参加者の領域への方向を示す (例 (20), (21) 参照)。しかし、ティディム・チン語のように被動者や受領者、被使用者が談話参加者であっても *hōŋ-* は義務的に付加しないようである (例 (22), (23) 参照)。

- (20) *hōŋ- pāi =ôu*  
 DIR- go<sup>I</sup> =IMP  
 「来なさい。」 [ティディム・チン語の例]

- (21) *hōŋ- kēl =ò?*  
 DIR- *go<sup>l</sup> =IMP*  
 「来なさい。」 [ラルテー語の例]

- (22) *lǎlpá:n hōŋ- tǎ:i*  
 chief.ERG DIR- *scold<sup>l</sup>*  
 「主人はあなたを叱りました。」 [ティディム・チン語の例]

- (23) *lál =in ā= tēi =ci?*  
 chief =ERG 3= *scold<sup>l</sup> =2.OBJ*  
 「主人はあなたを叱りました。」 [ラルテー語の例]

#### 4. 3. 2 再帰接辞 *-dū:n*

動詞接尾辞 *-dū:n* は再帰や相互動作等を示す。相互用法の例を (24) に、再帰用法の例を (25) に示す。例 (26) のように動作者を明示しない用法もあるが、述部動詞には三人称の人称助詞 *ā=* を置く。このラルテー語の接尾辞 *-dū:n* と似た働きを持つ再帰接辞は周辺言語にも見られるが、ティディム・チン語は *ki-*、ミゾ語は *in-* であり、動詞接頭辞として現れる。

- (24) *bō:ŋ =lə? kē:l ā= sī -dū:n =ù?*  
 cow =and goat 3= *butt<sup>l</sup> -REF =PL*  
 「牛とヤギが突きあっています。」

- (25) *kā= bē -dū:n*  
 1= *speak.to<sup>l</sup> -REF*  
 「私は自分に言いました。」

- (26) *kô:ŋk'à? ā= hō:ŋ -dū:n*  
 door 3= *open<sup>l</sup> -REF*  
 「ドアが（何者かによって）開けられています。」

#### 5. まとめ

本論文では、ラルテー語の人称標示について報告した。一人称複数形における包括形と除外形の区別や二人称の人称助詞の (*na*) という音形、複数を示す助詞 *=ù?* の存在等、北部チン語群のティディム・チン語と類似した点を多く持ちながら、目的語の人称を示す人称助詞の存在等、中部チン語群のミゾ語との共通点も見られた。チン語支諸言語のサブグループ化に向けた対照研究を更に進めていく為には、今後もラルテー語を詳細に記述していく事が重要である。

## 略号

- (affix boundary) 接辞境界 / = (clitic boundary) 接語境界 / A>B (A toward B) AからBへの動作の方向, Aが動作者でBが被動者 / A/B AまたはB / 1 一人称 / 2 二人称 / 3 三人称 / <sup>1</sup>(verb stem form I) 動詞語幹形式 I / <sup>II</sup>(verb stem form II) 動詞語幹形式 II / ABS (absolutive) 絶対格 (ラルテー語, ティディム・チン語, ミゾ語ではゼロ標示) / ADV (adverb) 副詞 / C (consonant) 子音 / DEM (demonstrative) 指示詞 / DET (determiner) 限定詞 / DIR (directional affix) 方向接辞 / ERG (ergative) 能格 / EXC (exclusive) 叙外形 / FUT (future) 未来 / GEN (genitive) 属格 / IMP (imperative) 命令 / INC (inclusive) 包括形 / IRR (irrealis) 非現実法 / LOC (locative) 場所格 / NEG (negative) 否定 / OBJ (object) 目的語 / PERF (perfect) 完了 / PL (plural) 複数 / Q (question) 疑問 / REAL (realis) 現実法 / REF (reflexive) 再帰および相互 / SG (singular) 単数 / T (tone) 声調 / V (vowel) 母音

## 参考文献

- Chhangte, Lalnunthangi (1986) *A PRELIMINARY GRAMMAR OF THE MIZO LANGUAGE (TIBETO-BURMAN)*. MA thesis, The University of Texas at Arlington.
- Chhangte, Lalnunthangi (1993) *Mizo Syntax*. Doctoral dissertation, University of Oregon.
- Henderson, Eugénie J. A. (1965) *Tiddim Chin: A Descriptive Analysis of Two Texts*. London: Oxford University Press.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig eds. (2016) *Ethnologue: Languages of the World*, Nineteenth edition. Dallas: SIL International. Online version: <<https://www.ethnologue.com/language/ral>> (アクセス日: 2016/7/26)
- 西田龍雄 (1989) 「チン語支」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 世界言語編 (中)』 2: 995-1008. 東京: 三省堂.
- 大塚行誠 (2009) 「ティディム・チン語における方向接頭辞 *óŋ-*」 東京大学言語学論集 28: 197-218. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 大塚行誠 (2013) 「ティディム・チン語における文の下位分類」 澤田英夫 (編) 『チベット=ビルマ系言語の文法現象 2 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』 175-201. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

# The Person Marking System in Ralte

Kosei OTSUKA

Keywords: India, Mizoram, Chin, Mizo, Ralte

## Abstract

Belonging to the Kuki–Chin subgroup of Tibeto–Burman languages, Ralte is spoken primarily in Mizoram in northeast India. This paper provides an overview of Ralte’s person–number agreement based on data collected in Mizoram, in comparison with two other local Kuki–Chin languages: Mizo and Tiddim Chin.

(おおつか・こうせい 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)